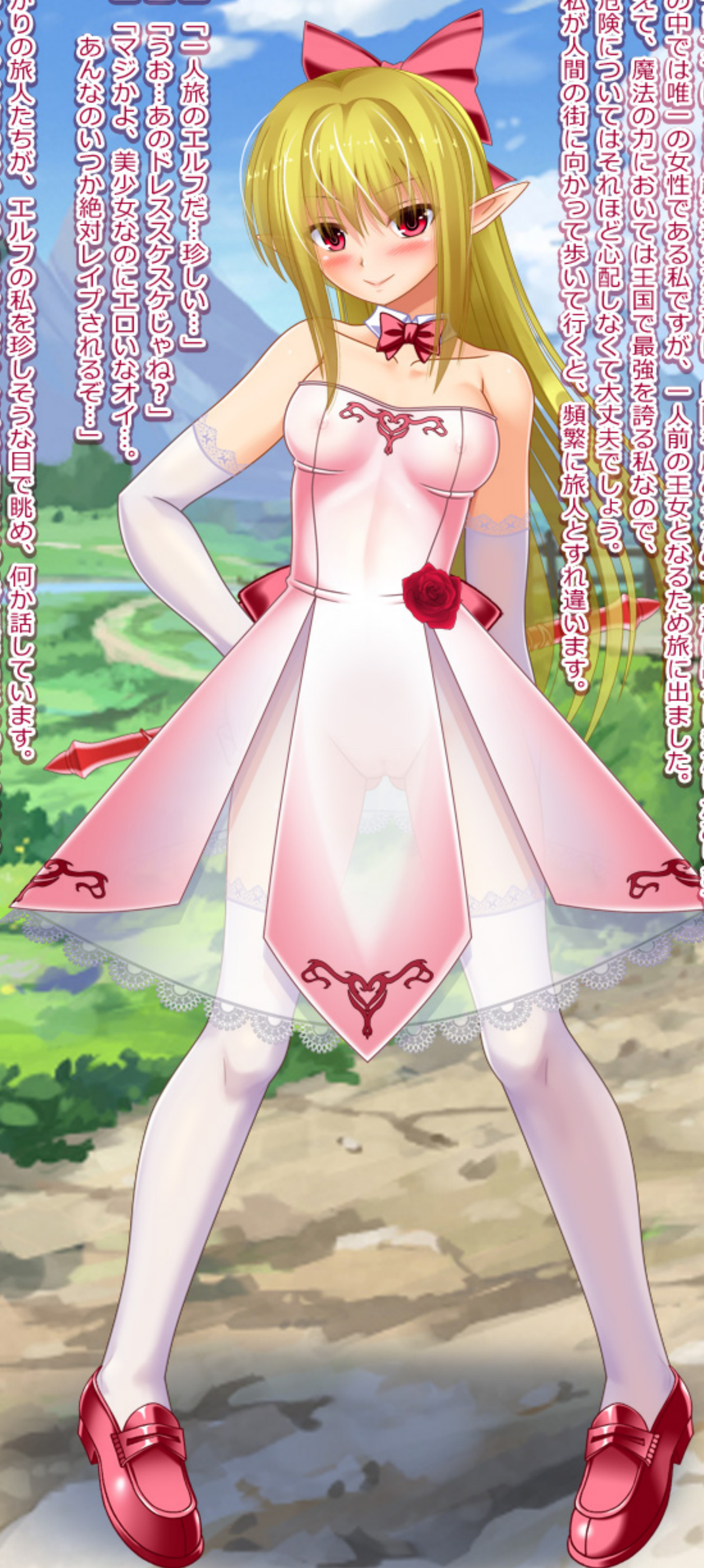


私の名前はエリス＝ラヴィナリア。深き森の奥にあるエルフの小国、ラヴィナリア王国の第二王女です。年齢は150歳であり、人間の年齢で換算すると丁度05歳になります。ラヴィナリアでは150歳を迎えた王族は、見聞を広めるため一人旅に出るしきたりがあります。王の子の中では唯一の女性である私ですが、一人前の王女となるため旅に出ました。こう見えて、魔法の力においては王国で最強を誇る私なので、道中の危険についてはそれほど心配しなくて大丈夫でしょう。そんな私が人間の街に向かって歩いて行くと、頻りに旅人とすれ違います。

「旅人」 「二人旅のエルフだ…珍しい…」
「旅人」 「うお…あのドレススケスケじゃね？」
「旅人」 「マジかよ、美少女なのにエロいなオイ…。
あんなのいつか絶対レイプされるぞ…」



通りすがりの旅人たちが、エルフの私を珍しそうな目で眺め、何か話しています。

エロとかレイプが何の事かわかりませんが、それも見聞を広めれば理解出来るのでしよう。

■パーソナリティ

名前：エリス=ラヴィナリア

称号：ラヴィナリア王国王女

種族：エルフ 年齢：150歳

身長：151cm 体重：42kg

■能力値（10が人間の平均値）

筋力：3 器用：10 魔力：245

体力：8 敏捷：15 精神：156

■スキル（10で一人前）

水魔法：76 治癒魔法：24

風魔法：55 鑑定魔法：13

■装備

武器：魔法のロッド

頭部：リボン（赤）

胴部：エルフのドレス（白）

腕：長手袋（白）

足：ニーソックス（白）

下着：（未装備）

■経験

処女

■ステータス

平常



街に到着した私は、まずは冒険者が集まるといふ酒場へと向かいました。人間の世界で生きていくためには、人間の世界で流通している通貨が必要であり、私のような魔法使いがお金を稼ぐためには、冒険者の酒場で仕事を探すのが一番と、通りすがりの旅人たちに教えてもらったからです。

「エリス」 「ここが冒険者の酒場ですか。 凄い…人間が大勢いますね…」

「店長」 「いらっしゃい…うおっ、エルフとは珍しいな…」

周囲の冒険者たちの視線が私に集中します。やはりエルフの一人旅はよほど珍しいのでしょうか。

「店長」 「で、可愛いエルフちゃんが…何の用だい？」

「エリス」 「はい、お仕事を頂きたいと思ひまして」

そう告げると、店長はいくつかの仕事を探して、私に提案してくれました。



私が選んだ仕事は、初心者向けのゴブリン退治で、人間社会での仕事のやり方を学ぶ事にしました。

【店長】「アンタくらいの魔法使いなら楽な仕事だろうな。で、お仲間は何？」

【エリス】「え？ 仲間はいません、私一人ですよ」

【店長】「おいおい……いくら雑魚とは言え、ゴブリンは狡猾だ。しかも性欲も強い。アンタみたいな美少女エルフ、もし負けたらレイプされちまうぞ？」

【エリス】「大丈夫、負けませんから。」

もし負けるような事があれば

レイプでも何でもやってみればいいのです」

レイプの意味がよくわかりませんが、私の魔法は、エルフの森に侵入した巨人や魔獣を一撃で倒すほど強力であり、雑魚であるゴブリンなんかには負けるはずがありません。仕事を請け負った私は、意気揚々と酒場を出て、ゴブリンの巣へと向かいました。



私は野生の馬を捕まえ、魔法で操って乗り、ゴブリンの巣のある森までやってきました。ゴブリンの巣には大きな朽ちた扉があり、大昔に作られ廃棄された遺跡のようです。勝手に住み着いている事が予想されます。

「エリス」 「ここがゴブリンの巣？ どうやら遺跡は地下に続いているみたい…。

薄暗い地下はあまり好きではないのだけれど。

ま、所詮はゴブリン、何とかなるでしょう」

扉の隙間からは、獣臭い匂いが立ち込め、ここにゴブリンが住み着いている事がわかります。

「エリス」 「うう…初めて嗅ぐ匂いだけど、何コレ…。 獣臭さ以外にも、

焼いたイカ？ 栗の木の花？ こんな匂いも混ざってるの…？」

鼻を衝く悪臭。 私はその悪臭に顔をゆがめながら、ゴブリンの巣へと侵入しました。



私はゴブリンの巢に入り、奥へと進んでいきます。 何度かゴブリンが襲い掛かってきましたが、私が軽く魔法を見せ付けてやると、血相を変えて遺跡の奥へと逃げて行きました。 所詮は雑魚です。 ですが私はそれよりも気になっていた事がありました。

「エリス」 「…それにしてもこの匂い、一体なんだろう…」

臭いんだけど、そんなに嫌いじゃないかも…」

遺跡の中に立ち込める異臭、臭いはずなのに、もっと嗅いでいたいと思わせるような匂いに、何故かドキドキして、下腹部の辺りが切なくなりません。 しかしエルフの私が、ゴブリンの体臭でこんな気持ちになるはずがありません。 恐らく何か独特の香でも焚いているのだろう。 折角だからそれも持って帰ろうか。 そんな考え事をして油断した私のスキをついて、ゴブリンが襲い掛かって来ました。



■パーソナリティ

名前：エリス=ラヴィナリア

称号：駆け出し冒険者

種族：エルフ 年齢：150歳

身長：151cm 体重：42kg

■能力値（10が人間の平均値）

筋力：3 器用：10 魔力：245

体力：8 敏捷：15 精神：156

■スキル（10で一人前）

水魔法：76 治癒魔法：24

風魔法：55 鑑定魔法：13

■装備

武器：魔法のロッド

頭部：リボン（赤）

胴部：エルフのドレス（白）

腕：長手袋（白）

足：ニーソックス（白）

下着：（未装備）

■経験

処女

■ステータス

発情：弱



私は背後から不意打ちしてきたゴブリンの攻撃を回避すべく、咄嗟にその場から飛びのきました。しかし、それがゴブリンの罠で、飛びのいた先に仕掛けられた落とし穴に、まんまとハマってしまいました。

「エリス」 「……きゃあっ！」

咄嗟に浮遊落下の魔法を使ったので、落下によるダメージは受けませんでした。私は尻もちをついて転倒してしまいました。落下した地下道にもゴブリンは待ち構えており、転倒した私から魔法のロッドを奪い取って行きました。

「エリス」 「っーし、しまっ……た……」

魔法の媒体たるロッドが無ければ魔法は使えません。私は追い詰められてしまいました。

「ゴブリン」 「ケツケツケ、エルフダエルフ」

「ゴブリン」 「コイツノーパンダツ」

「ゴブリン」 「タシカエルフハ、モリデハハダカデクラシテルンダツタナ」

「ゴブリン」 「オアツラエムキダ、ゲツゲツゲ…」

「エリス」 「うぐっ…まさかエルフの
王女たる私が、ゴブリンに
してやられるなんて…」

ゴブリンは尻もちをついて座り込む私を囲みました。
恐らく私はこいつらに殺されてしまうのでしょうか。

そう覚悟していたのですが、何故かゴブリンは武器を捨て、
粗末な腰巻を脱ぎ捨て、全裸になって近寄って来たのです。

そして不思議な事に、ゴブリンの股間にぶらさがっている、
おそらくは排泄のために存在する器官が、むくむくと膨らみ始めました。

これはゴブリンの武器なのだろうか、私はその様子を凝視する事しか出来ませんでした。



「ゴブリン」 「ゲツゲツゲ…コイツ、オレノチンポヲミツメテヤガル」
「ゴブリン」 「フーパシタシ、キタイシテルンジャネエカ」
「ゴブリン」 「タツプリトシキユウニセイエキヲソソギコンデヤルカラナ」

このような排泄器官は、男性のエルフにも備わっていますが、こんなに醜悪な見た目で、大きく膨らみ、異臭を放つものは初めてです。その排泄器官には、垢がべつとりとこびり付き、それが強烈な匂いを放っています。

「エリス」 「…この匂い…まさかこれが…」

そしてそれこそが、私がゴブリンの糞に踏み込んでからずっと嗅いでいた、下腹部を疼かせる匂いの発生源である事に気が付きました。



私がゴブリンの排泄器官を見ていると、ゴブリンがそれを近づけてきます。

「ゴブリン」 ソンナニチンポガミタケレバジツクリミセテヤルヨ
「ゴブリン」 「コイツガオマエヲオカスチンポダ、ヨクオボエトケ」

「エリス」 「…チンポ？ これで私を

犯す…？ 一体何の事…」

彼らは排泄器官はチンポと呼んでいるようです。

しかし、エルフの世界では男性の排泄器官は弱点であり、

これで私を攻撃するとは到底思えません。

しかも、彼らは弱点であるチンポを、わざわざ私に近づけているのです。

一体何をやる気なのか全然見当もつきません。

しかし、その匂いは下腹部の疼きを二層強くして、何故か私の下腹部からは、

おしっことは違う液体が垂れ落ち初めている事に気が付きました。



■パーソナリティ

名前：エリス=ラヴィナリア

称号：敗北した冒険者

種族：エルフ 年齢：150歳

身長：151cm 体重：42kg

■能力値（10が人間の平均値）

筋力：3 器用：10 魔力：245

体力：8 敏捷：15 精神：156

■スキル（10で一人前）

水魔法：6 治癒魔法：14

風魔法：5 鑑定魔法：13

■装備

武器：（未装備）

頭部：リボン（赤）

胴部：エルフのドレス（白）

腕：長手袋（白）

足：ニーソックス（白）

下着：（未装備）

■経験

処女

■ステータス

発情：中



「ゴブリン」 「オオ？ コイツ、モウヌレテヤガルゼ」
「ゴブリン」 「チンカスノニオイデコウファンスルトハ、エルフノクセニヘンタイダナ」
「ゴブリン」 「マン」コラヌラスデマガハブケタゼ、ゲツゲツゲ」

「エリス」 「…濡らす手間…？」

股間の割れ目を湿らせる事に、
一体何の意味が…キヤアツ！」

私の股間の割れ目から液体があふれているのを見て、
ゴブリンの1匹が股間に手を伸ばし、割れ目を広げました。
敏感な私の割れ目が左右に開かれ、ピンク色の肉が露わになります。

「ゴブリン」 「コイツ、チンポノニオイデコウファンシテルクセニシヨジヨダゼー！」

ゴブリンは私の割れ目の肉を見て、歓声を上げていました。



「ゴブリン」 ヲラクガジヤマダナ

「ヤブツチマエー」

「ゴブリン」 「オット、テブクロトクツシタハ

「ヤブクンジャネエツ」

「エリス」 「なっ…何するの…！ やめっ…キヤアー」

《アハハハハハハハハ》

ゴブリンは私のドレスに爪を立て、
思い切り引き裂いてしまいました。

もう私の身を守るものは、

リボンと靴下と手袋くらいしかありません。

完全に無防備になった私に、再びゴブリンが近づいてきました。



「ゴブリン」 「ホラ、ジブンデワレメラ

ヒラケ、キモチヨクシテヤル！」

「ゴブリン」 「サッサトシロー！ ノコッタテヲクロト

クツシタモヤブカレテエカ！」

「エリス」 「わ、わかったから…やめろ…」

「ひっ！ あああっ！」

私がゴブリンがやったように、

自分の割れ目を指で開いて見せると、

ゴブリンは割れ目にそって指を這わせ、

割れ目上部の突起部分を指で転がし始めました。

こんな所を汚い指でいじられているのに、

何故か私はほとんど気持ちよくなっ行ってました。



「ゴブリン」 「ケケッ！ コノエルラ

カンジテヤガル！

ナラコレハドウダ？ ケケッ！」

「エリス」 「こ、今度は何っ…ひっ…？」

何でそんなところ、舐めっ…

あっ！ ひぐっ…！」

ゴブリンは赤黒いザラついた舌を伸ばして、

私の割れ目を舐め始めました。

唾液をまぶされ舐めあげられると、

指でいじられるより何倍も気持ちよく、

快楽の塊のようなものが、下腹部から

脳天に上がってくるのを感じていました。



【エリス】「ひっ…な、何この感覚…」

何か上がってくるっ…ひぐっ…

あっ！ あああああああっっっっ！

【エリン】「ケケッ！ イッタイッタ！

シカモシヨンベンモラシヤガッター！」

《ぷしゃあああああああ…》

快樂の塊が脳天を突き抜け全身を支配し、

私は頭が真っ白になり悲鳴を上げていました。

あまりの気持ちよさに我慢できず、

私は思わずおしっこを漏らしてしまいました。

そして気持ちよさの波が収まるまで、私は痙攣を続けました。



■パーソナリティ

名前：エリス＝ラヴィナリア

称号：おもらしエルフ

種族：エルフ 年齢：150歳

身長：151cm 体重：42kg

■能力値（10が人間の平均値）

筋力：3 器用：10 魔力：245

体力：7 敏捷：15 精神：142

■スキル（10で一人前）

水魔法：6 治癒魔法：14

風魔法：5 鑑定魔法：13

■装備

武器：（未装備）

頭部：リボン（赤）

胴部：（未装備）

腕：長手袋（白）

足：ニーソックス（白）

下着：（未装備）

■経験

処女

■ステータス

発情：強



【エリス】 「ひゅっ…はあっ…はあっ…」

快樂の波が収まってきた、やっと少し思考力が戻りつつある私の目の前に、先ほど見たゴブリンのチンポが近づけられました。チンポはあの異臭を強く放っており、固く大きく、私はなぜかそれが欲しくてたまりませんでした。

【ゴブリン】 「オレノチンポガホシイカ？」

【エリス】 「っ…ほ、欲しいですっ…」

その汚いチンポで、割れ目をこすり上げて欲しい。垢を塗り付けて欲しい。私は快樂で頭がおかしくなったのか、それを心底から望んでしまいました。



「ゴブリン」 「ホラ、ドウダ？」
「エリス」 「ひっ……！ あうっ……！」

ゴブリンはチンポを私の割れ目に近づけ、
チンポの先端を割れ目にこすりつけはじめました。
チンポの先端から出ているヌルヌルした汁と、
チンポにこびり付いているネチヨネチヨした垢が、
熱くて固いチンポで割れ目に塗り付けられると、
何故かチンポで割れ目を貫かれないと考えていました。

「ゴブリン」 「ソレジャツツコンデヤル！」

私の気持ちを察したのか、ゴブリンが割れ目にチンポを強く押し当てました。

